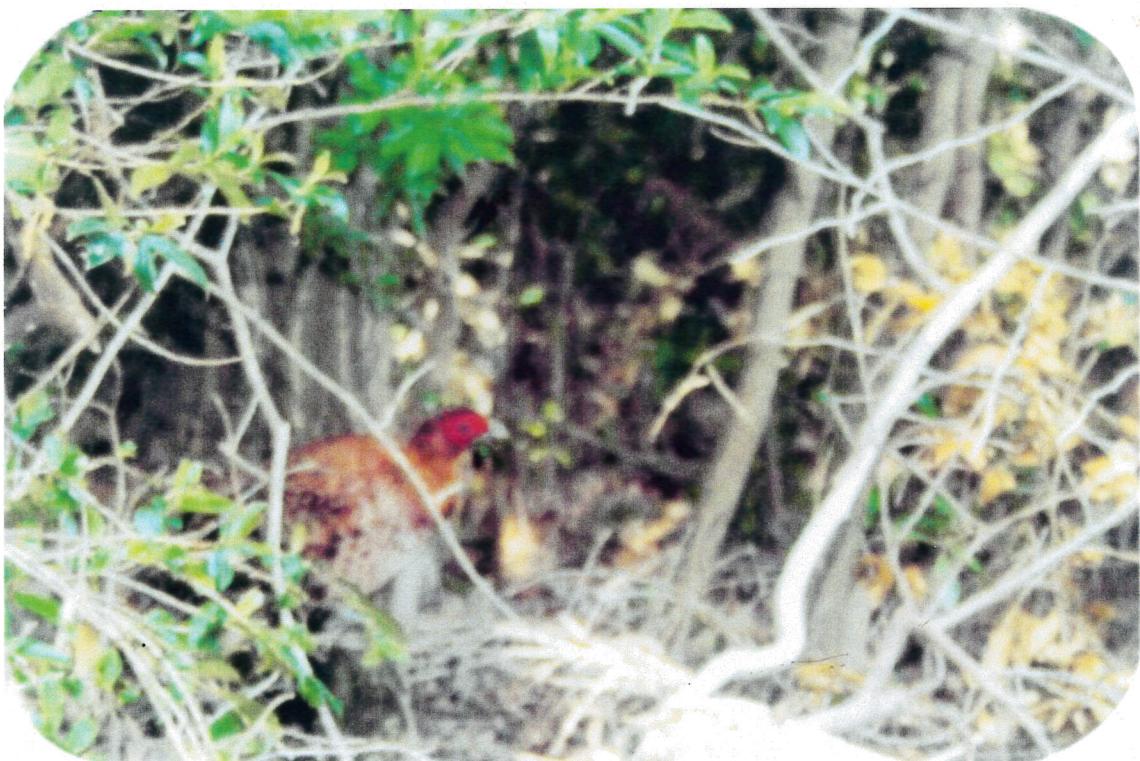


# 滝ノ沢 町有林 の — 守護神 となつた 山鳥 —

— 故 増田幸次さんを悼む —



2006年 5月 21日 里山整備計画に基づいて、中山頂上に展望の丘をつくり、  
雑木を使って素敵なおんちを造りました。完成を祝っておんちに座っていた私たちの  
眼前に山鳥が突然 姿を見せました。

その姿は大きく 悠々と歩く姿は美しく 心うたれました。小川町の大地で 山鳥が  
人の目に触れる事は珍事。山鳥は野の生きものたちでも貴重種。

その山鳥を見て私たちは直感しました。

これは山の神が山鳥を「神の使者」として遣わし、私たちの町有林整備活動を喜び  
祝福してくれたのだと。

だが この日 いつも居る増田さんの姿はなかった。

2006年 7月 11日。増田さんの突然の訃報。私たちは言葉を失い その余りにも早  
い死に衝撃を受けました。

町政の長を去って四年余。ひとりの町民として悠々人生。にこやかな笑みで人と自然に接する誠実な人間性と行動力。

21世紀の小川町の未来。資源循環型社会を目指し、自然エネルギーに意欲を燃やした事。環境基本計画に基づき、○**憩いの森** ○**循環の森** ○**体験の森**と名づけた町有林の里山づくりの夢。人材を結びつける夢。

そんな夢が無念にも絶たれた今、増田幸次さんの里山づくりの熱い想いが、私たちの目の前に表れた山鳥に化身したのだと 増田さんが逝った今 改めて思う。

里山づくりの夢は私たちが受け継ぎ 育てます。  
どうぞ見守って下さい。心からご冥福を祈ります。合掌

2006・8・27 小川里山クラブ You You  
会長 佐藤 章



上写真 左が町有林の下刈りに汗を流す 在りし日の増田幸次さん

## — ガン病棟からの便り —

### また再び小川の豊かな大地に

緑は日毎に濃く 生きるもの万物の力の素晴らしいしさ、逞しさを感じます。

お変わりございませんか。その切は有難うございました。

私が体調を崩し入院したのは四月二十二日、早一ヶ月経ちました。

はじめ入院したのは小川日赤で五月十七日まで在院しきつもの検査をやりました。検査の結果わかったことは五月十一日午後一時 主治医から直管腫瘍（ガン）であるとの告知を受け、ある程度覚悟していたものの 言いようのないショックを受けました。

なぜ？ どうして？ とても信じられるものではありませんでした。医師の説明は更に、ガンの部位はむづかしいところであり、当院で対応できる状況ではない、ときびしい病状説明があり 私にとっては悪い方、悪い方の結果となりました。

医師の説明は更に続き、「僭越ながらより良い病院を手配させていただきました。増田さんの住居から最も近いところは、群馬県立ガンセンターですので、五月十八日診て貰って判断して貰ってください。」とのことでした。事態のきびしさは相当のもの、であるとの認識を持たざるを得ませんでした。

日赤の外科医 金先生も立派な医師でした。大変お世話になった、と思っています。

五月十八日 群馬県立ガンセンターの外来で診察、入院申込みをして連絡を待ちました。

連絡があり 五月二十五日 県立ガンセンターに入院しました。主治医である胃腸・消化器科の医師と内科医とでよく検討する、とのことで、委ねるに足る体制がとられていることに満足しています。

ガンとの闘いに勝ち

## 肺腑一杯の空気を共に

2006・6・7



初めはガンであること、それもきわめて難しい部位に突然巣喰われてしまったことを嘆き恨みましたが、現実を受容するよりないこと、そして、ある種の覚悟を決めました。

「人間、生命ある限り、しっかり生きていくのだ」と。病気・ガンとの本格的闘いが始まりました。

また再び、小川の豊かな大地に立って、皆さんと一緒に汗を流し、緑の風に吹かれて肺腑深々と空気を吸いたいと思います。

健康は失って初めてその有難さが分かるもの、お身体大切に頑張って下さい。

5/27 群馬県立ガンセンター 2F病棟2-8号室にて  
増田 幸次



ウグイスカグラと銀蘭



突然のガンの告知のお便り。大変驚愕いたしました。増田さん的心を思いやると無念でせつないものがあります。

プリム問題以来 18年。明るく前向きに生きる姿勢に尊敬と信頼、生涯の友、同志となる人と確信しました。

世界自然遺産の白神山地へも共に行きました。地方の時代とも言われる21世紀の地域づくり、町づくりでは、八森町の町長等とも肝胆相照らす姿に、ますます畏友との感を強めました。お手紙を拝読するに従い、更にその感を強めました。

「突然 巣喰われてしまったことを嘆き 恨みましたが、現実を受容するよりないこと、そして、ある種の覚悟を決めました。

人間、生命ある限り、しっかり生きていくのだ」

この言葉には増田さんの生の実践哲学が凝縮しています。

また この言葉はガンとの闘いの宣言であり、限りある生命の深みから発せられた言葉です。

最愛の奥さま、医師、看護士等の皆様と共に、この闘いを勝ち抜いて下さい。

小川の大地、とりわけ私たちが5年間にわたり調査・整備した町有林の樹、植物、小動物、昆虫、小鳥たちを始めとするすべての野の生きものたち、里山クラブの全員が増田さんの闘いを支え祈ります。

緑の風に吹かれ 汗を流し、銀ラン、金ランを愛で 肺腑一杯の空気を共に吸う。こんな日が近いことを祈っています。



小川町里山クラブ You You 一同

# 白神の夢



悠久の森“白神”



自然資源など活用促進型交流促進施設  
秋田県山本郡八森町・本館自治会



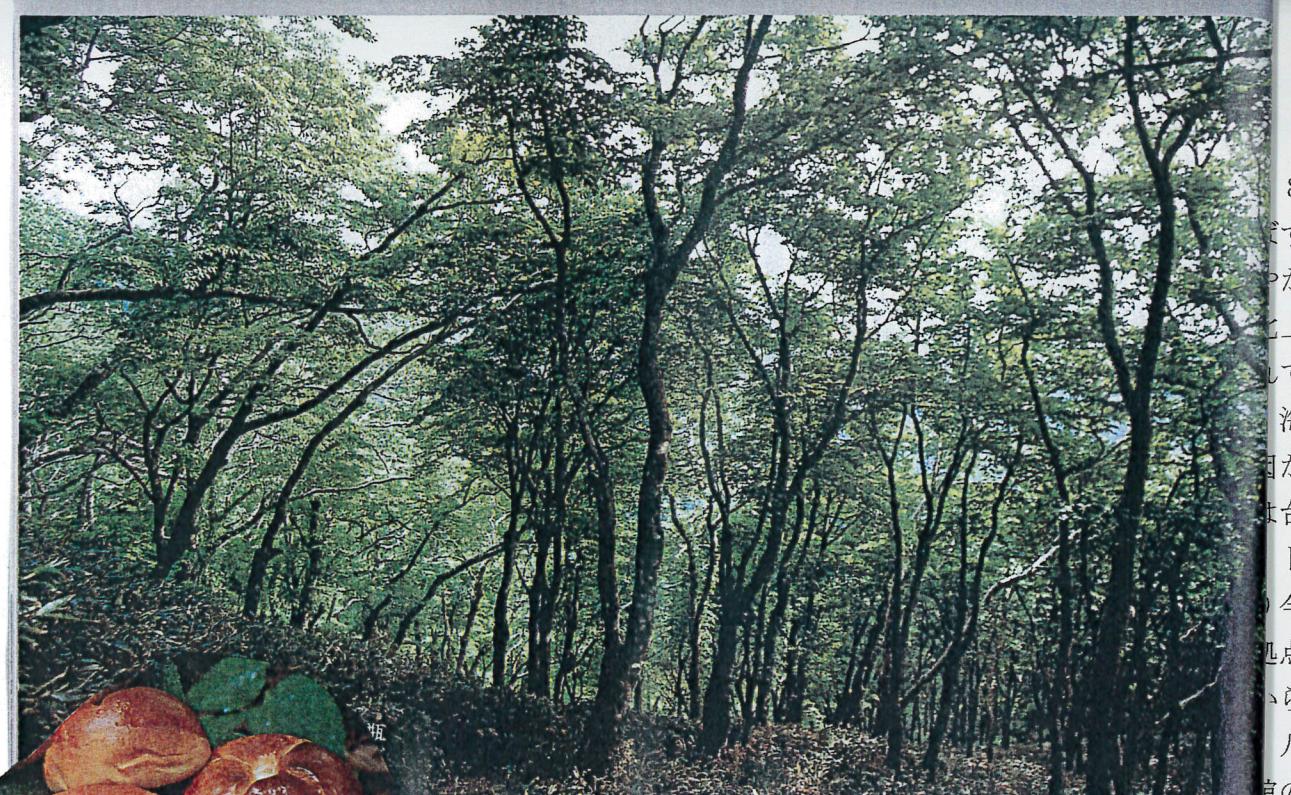
グリーンツーリズム  
**夕映の館**



## Shirakami's Dream

白神山地には  
人類史の時間を遙かに超える  
自然史の時間がある  
その麓には  
限られた時間を生きる  
人間の奇跡の時間もある





## 白神が凝縮された風景



(クマの爪跡があるブナの大木)



## 小川町里山クラブ

### 「白神の夢」の里一八森町へ出陣

8月28日（土）早朝5：00小川町出発。東北道に羽生より乗り、一路秋田へ快調に車を飛ばす。アウトドア派の小池さんの運転は見事でドライブを愛する男の本領を発揮。優しさとしなやかさの風は時速120km。小池さんの愛車（本田のCRV）は宇都宮、福島、仙台を通り、海上から秋田道へ。7月28日（土）夕の大曲の花火大会で車は渋滞。秋田に予定より1時間遅れて入る。

海岸通りの車から見える風景に一同驚愕。広葉樹林が一面の立枯れ。今年の雨不足と酷暑が原因か、地球の温暖化でここまでできたのかと論評ガクガク。後で分かったのだが、この立枯れ現象は台風による塩害ということが判明。

ドキュメント「白神の夢」の情景がぐんぐんと近づき、八森町の役場に午後3時到着。役場より今夜の宿である夕映えの館に向う。日本海の夕陽に映える小高い所にある館は、地域の交流拠点、都市と農村を結ぶグリーンツーリズムの拠点として平成13年4月にオープン。夕映えの館から西南の方向に男鹿半島が見える。

八森町の産業振興課長の武田武さん、夕映え館長の斎藤進さんの出迎えを受けて館に到着。本館の魚山村の情景あふれる原風景を堪能。茅葺き屋根の民家は300年の歴史を伝承し、笑顔が人をひきつける斎藤貞さんのお住まいである。

ドキュメント映画「白神の夢」で鶏の解体をして、人が鶏の命をいただくという意味を衝撃的に見せた斎藤さんの案内で、地鶏の飼育場を見学。キツネやタヌキ、テンやイタチの防御で厳重に張られた金網越しに、米を中心とした餌付けのうっこけいを見学。その姿は精悍で、その味は美味である。

400年前の「本館城」の話を聞きながら、夕映え館に戻る。館のソバうち体験小屋では、石臼で挽いたソバ粉でソバ打ち真盛り。小麦等は一切混ぜない純度100%のソバ粉。熟練した腕は地元の主婦。明日の悠久の森一白神フェスティバルの準備とのこと。地元の主婦の技とその助手である若い娘さん2人。地域おこしの夢と情熱を感じさせる。

### 夜の交流会は熱弁の花—白神の酒「白瀑」に酔う—

里山クラブyou youは郷土の名酒、下里の有機米で醸造した青雲の「小川の自然酒」、片や八森の名酒「白瀑」、白神のブナの原生林から貯えた湧き水と秋田小町の米から生み出された酒。自己紹介から始まった交流会は杯を重ねる内に、互いの夢が交錯し花を咲かせ、時には火花を散らすこともあった。出席者は八森町産業振興課長 武田武さん、夕映えの館館長 斎藤進さん、茅葺き屋根の魅力的な斎藤貞オバアちゃん、その他地域の方3名。里山クラブは小池、馬場、増田、左藤であった。

森と海をワンセットにした八森町も戦後数十年、山も荒廃し名物ハタハタも危機におち入り、吉人も流出し過疎化が進行する厳しい現実に直面していた。

10年前から一旦ハタハタ漁は禁漁とし、その後は資源保護の立場から、資源管理型漁業とし、ブナ林を保全し育て名物ハタハタは海に戻った。

春秋林道反対の「ブナ原生林を守る運動」を契機にしてブナの伐採を止め、さらに守る運動の生き物たちにいのちの糧を与え、葉を落として地を覆い、天文学的数の微生物を養う。白神ら積極的に創る運動を展開し世界自然遺産決定まで勝ち取った。住民の持続するパワーは衰えず有りの種の遺伝子を悠久の昔から受け継ぎ、たゆまず繰り返す遺伝子の秩序を保全し、人間社会ことなく100年の森と海づくり、祭りや暮らしの中の智恵や技術、文化を伝承し、子供から共存させていく智恵と情熱、技術力がますます求められていくと感じながら留山を下る。年寄りまで巻き込んで現在進行中である。

ドキュメント「白神の夢」では子供たちが体験学習で白神山地の地形や地質、歴史を学び、白神のブナの原生林によって育まれた腐葉土、土壤微生物、ミジンコ、イワナなどを含めて森から海に至る白神固有の種や遺伝子の継承システムを学ぶ。低温でも強い発酵力を持つ白神酵母菌によるパンづくりを体験する子供たち。伝統の祭りである白瀑神社での神輿の滝あび。

白神の夢とは白神固有の地域資源—自然と伝統—の掘り起こしから山と海、二つの森づくりあいパーク特設ステージで開催された。4回目を迎えた白神フェスティバルは台風16号が来る前に至る白神固有の種や遺伝子の継承システムを学ぶ。低温でも強い発酵力を持つ白神酵母菌によるパンづくりを体験する子供たち。伝統の祭りである白瀑神社での神輿の滝あび。

白神の夢とは白神固有の地域資源—自然と伝統—の掘り起こしから山と海、二つの森づくりあいパーク特設ステージで開催された。4回目を迎えた白神フェスティバルは台風16号が来る前に至る白神固有の種や遺伝子の継承システムを学ぶ。低温でも強い発酵力を持つ白神酵母菌によるパンづくりを体験する子供たち。伝統の祭りである白瀑神社での神輿の滝あび。

## ブナの巨木にクマの爪跡—留山散策—

2日目、白神ネイチャー協会会長の工藤英美さんの案内で留山に入る。車で約20分登山口に進入。入口に「熊出没」の看板あり。この登山口でもかつて豊かな原生林であったブナ林が伐採され、何もないブナ林は伐採。これはバブル全盛期1980年代後半までのお金と物に狂った日本の現実、と語る工藤さんの言葉には怒りと哀しさがあった。

工藤さんたち八森町の有志がブナの森づくりを結成したのは平成9年（1997年）。合言葉は第4回白神の詩コンテスト大賞は東京都で闘病中の萩原三津夫さん。その大賞の作品「森のうた「山の森、海の森、二つの森づくり」。ブナの植林により、養分の富んだ良質の水をつくり、川がきこえない」の終章は次のような詩であった。

通してハタハタなどの産卵場である藻場の再生につなげる夢は、私たち里山クラブの面々の胸を打った。白神ネイチャー協会は毎年秋に首都圏などの市民に呼びかけてブナの植林をボランティアで行い、今年度は6000本まで植えるという。

群生するチシマザサの間にそりたつブナの巨木。根元の太い幹にからみつく巨大なフジの蔓。からまる蔓に締めつけられ、その巨体を見事うねらせるさまはブナの裸身にからみつく大蛇を想像させ、生殖の豊饒さとエロスの世界に誘う怪しい生命力を放射していた。3mから5mの高さに生々しいクマの爪痕やクマゲラの穴。まさにここは野性の生き物たちの王国で、かつては人間の立ち入りを許さない聖なる森であったと思われた。10mから15m位で何本にも分かれた枝を感じさせる木も風雪との数百年の闘いで見事な枝ぶりを見せ、その巨体と連動して圧倒的な存在感、樹齢数百年の力を感じさせた。チシマザサに埋められるように横たわるブナの倒木。その巨木の体には無数のキノコが生えて、白神の土壤の豊饒さと微生物が支配する輪廻転生の世界、悠久の森の懐の深さを想わせた。

工藤さんが私たちに、食べてみませんかと取り出したパンは、白神のブナの原生林で半年以上も雪に覆われた腐葉土から生まれた白神酵母菌でつくられたパンで、風味にはブナの湧き水の滋味な味がした。発見者は小玉健吉博士でこの酵母菌は寒さに強く、凍結保存しても生存率100%であるという。増殖、発酵も穏やかで小麦のグルテンをこわさずにパン粉を膨らませる優れものである。数千年生き続けるブナは天水を保って森を潤し、実をつけて鳥、クマ、野ネズミ

## 白神の夕は縄文の森の音楽に酔う

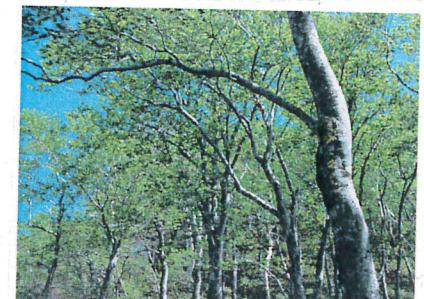
8月29日夕、八森町町制施行50周年記念—悠久の森—白神フェスティバルに参加した。癒しの森—白神やすらぎコンサートと名づけた会場は、ハタハタ館の上の日本海を眼下におさめるふ

の夢であり、地域共同体を熱く結ぶ人々の思いを掘り起こすことである。このことを人情味豊かにする2日前で、夕映えに映える日本海とブナの原生林の山をバックに始まった。出演者は、

- ♪「赤い鳥」で「竹田の子守歌」「翼を下さい」の山本潤子さん
- ♪2004年アテネ五輪代表選手団公式応援歌「夢がチカラ」のKOKI Aさん
- ♪自然との共生、調和をテーマに活動し、白神のブナの植林活動をしている異色のシンガーガー、

自然派ミュージシャンで豪華な顔ぶれであった。

人間だって自然の一部	耳をすまして手をつなぎ
仲間になってうたいたい	森の歌を唄いたい
きっといつかは唄えるさ	きっとしっかり唄えるさ
森の歌は唄えるさ	人間だって森の仲間に
なれるさ からなはず	



森の歌が唄えなくなっていた人の心に、森の仲間となって森の歌と一緒に唄うことの歓びを感じさせる詩であった。

熊やカモシカやって来て	鳥もたくさん集まって
風のリズムに声あわせ	毎日歌を唄ってた
おやおや人には聞こえない	自然の声が聞こえない

歌の力は優しく強く深く心と体を揺り動かされた。それは茅葺き屋根の民家をこよなく愛し、童女のように天衣無縫の83歳の齊藤貞さんの人情味豊かな心にも響き合い、

ブナの原生林とそこに住んでいたさまざまな生き物たちのいのちとも響き合っていた。女将は「白神の夢」と文化を育む会代表の奈

良沙冬子さん。宮沢りえのような美しい容姿で、その思念と情念は次のような言葉をしなやかに力強く紡ぎ出す。

縄文の森の昔から、豊かな白神の恵みによって命脈を保ってきた我々であるが、端正な顔をして現れた近代化という文明の波が押し寄せ様相は一変した。工業国へと変貌を遂げた戦後の日本社会は、農林漁業の衰退を招き、伝統行事、文化、先祖代々培ってきた暮らしの智恵などを継承する機会が失われた。農薬乱用、資源乱獲、経済発展から取り残された地域の活性化対策としての青秋林道建設問題（欲に目が眩んだ政官業の見事な結託）は、如何に人間が自然に対して傲慢になり、節度と感謝の心を忘れつつあったかの証左でもある。

週刊アキタ 平成15年2月21日より

私たち里山クラブの面々は、ブナの原生林に酔い、100年の未来を見つめて山の森、海の森づくりに汗を流す人々の夢と行動に共感し、自然と人間、人と人を結ぶ文化の力に勇気を与えられ、素晴らしい人達との出会いを宝だと実感した。白神山地で出会った皆さん、どうもありがとうございました。

#### 追記

「白神の夢」探索と八森町の人との交流、ブナの原生林遊行の旅は、全行程2,300kmの車の旅でもあった。中でも圧巻だったのは、青森十二湖より入った山岳道路白神ラインは、急カーブの砂利道でブナの原生林が生い茂る道でもあった。途中白神岳(1235m)向井白神岳(1250m)を間近に仰ぎ、ブナの原生林を俯観でき弘前まで3時間余の絶景のドライブロードでもあった。

2004.9.1

記 佐藤 章 増田幸次 小池岑生 馬場信一

